「看護補助者と多職種とのタスク・シフト/シェアにチャレンジ」

所属施設　三九朗東リハビリテーション病院
担当者氏名　勝田　亜由美

＜テーマ＞
「入浴介助のタスクシェア　～療法士との協働～」
＜現状と課題＞
当院は令和５年４月に開院した回復期リハビリ病棟に特化した病院である。職員は、３月まで系列病院で働いていた仲間で成り立っている。開院までの準備期間は短く、通常業務に加え、新病院の準備は想像以上に大変だった。しかし、新しい事にチャレンジできる喜びもあった。それは、集まった仲間が職種に関係なく患者中心に行動できる病院を作るということだ。これまでも患者中心のケアを心がけてきた。しかし、人は誰しも長きに渡って行ってきたことを変えることに少なからずの不安や抵抗を感じるものである。私もその一人であり、中々一歩を踏み出すことができないでいた。しかし、どういう病院にしていきたいかを管理者で話し合いを繰り返す中、同じ思いでいることが分かった。そこで、リハビリ部、看護部という独立した部署ではなく、リハケア部という１つの部署としての活動を始めることとなった。新しい環境でまず何を優先すべきかを理学療法士・作業療法士（以下、療法士）と話し合いを重ねた結果、入浴介助に着目することとなった。理由は、系列病院で入浴介助を行っていた環境と人員の違いにある。どのようにケアの介入を行ったら不慣れでもケアの質を維持できるか、療法士が入浴介助に介入するシステム作りが始まった。
＜目的＞
入浴は、患者にとって最もリラックスできるケアである反面、転倒リスクの高い場所でもある。人材を有効に活用し、安心して安楽に入浴できる体制を整備する。
＜計画と経過＞
① 業務改善のリーダーを療法士、看護師から選出
業務改善リーダーで２週間に１回を目安に話し合いの場を持ち、滞りなく行えていることや改善点などを出し合い、変更点を発信した。
半年経過した今では、看護補助も加わっており、家族介助目線としての意見交換も期待している状況である。
② 入浴時間はリハビリ予定を組む療法士が調整
療法士が前日までにリハビリ時間・入浴時間を決め、リハビリ振り分け表を用いて看護要員と共有した。また、このときに入浴担当の療法士の割り振りも行った。
当日振り分け表を用いて入浴担当の療法士と看護要員で入浴送迎・介助を行った。
③ 初回入浴は療法士と看護要員で介助をし、安全な入浴方法をその場で共有
初回入浴患者の入浴時間には必ず療法士が介入できるようリハビリ時間を調整し、看

護要員と一緒に入浴介助を行った。安全な入浴方法・必要な道具の選定を行い、入浴リストの必要物品欄や注意事項に入力した。

④ 機械浴の患者は療法士と看護要員で介助をし、介助量の多い患者への安全を確保し、個浴への移行時期を共に検討する場とする

機械浴の時間をまずは午後に固定し、療法士と看護要員で介入。介助量の多い患者の車椅子からシャワーチェアー、シャワーチェアーから機械浴への移乗を必ず２名で行い、安全確保をした。また、患者のＡＤＬ向上に合わせ、個浴への移行の視点を共に持ちながら介入とした。

これらの取り組みは、患者数が増えてきた今でも継続している。また、患者からは、入浴が１番の楽しみ、ゆっくりできる時間、気持ちよかった、毎日入りたいくらい、などの声も聞かれている。これらの言葉から、安心して安楽な入浴ケアの提供に繋がっているのではと考える。

＜結果と考察＞

新しい入浴環境で不安の声もあったが、療法士が入浴介助に携わることで浴槽すのこや浴槽台、バスボードなど必要な道具の選定が適切に行えた。また、介助量が軽減してきた際の入浴方法の検討も積極的に意見交換が行えていると感じている。その結果、看護要員がベッドサイドに足を運べる時間も増えたように思う。これまで入浴介助は看護要員が行う、という認識がお互いにあった。しかし、患者中心のケアという原点に戻り、入浴も生活場面で必要な訓練の 1 つという意識を持てたと考えている。私たちのリハケア部は、まだ始まったばかりだ。これから、さらなる患者中心のケアを目指して、職員全員が同じ方向に向かっていきたい。

（公益社団法人愛知県看護協会 HP 掲載用）